

◎野木京子 1月

火葬場の火が消えるとき

名も知らぬ

だれかのケーキに灯りがともる

夜（東京都）

*黄泉の世界へ旅立つ人と、どこか遠いところで誕生日を迎える知らない人。人が死ななくなったら地上は定員オーバーになり、新しい人の誕生も祝えなくなる。だから死ぬことは悲しいばかりではないかもしれない。

「ホームセンターなんて

最初から無かったんだよ」

みたいな更地の上に月

最上葉途（山口県）

*大きな店の敷地の中で、家や庭を整える物を探しまわった日々。その貴重な記憶ごと更地になった。地上でのどたばたをぽっかり浮かんだ月が見下ろしている。空地のぽっかり感と月のぽっかり感が共鳴している。

椿 落ちる

椿があったところ

の

空気

立花ばとん（東京都）

*花がぽとりと落ち、花はないのに、花があった空気感は濃く残っている。その気配が、三行目一マス下げの「の」で表現されていて、おもしろかった。

後輩が

部活をやめた日の朝は

校舎の窓がしんとつめたい

さいう（愛知県）

*同学年の子が部活をやめても淋しいけれど、後輩がやめると、淋しさだけでなく、自分に足りないことがあったのではないかと、自責の念もこみあげる。窓からまで責められているようで、心が冷たくなった様子を巧みに表現。

図書室に潜れば

砂にかくされた
気づきのような一冊がある

さいう（愛知県）

*図書室は、行くところでも入るところでもなく、「潜る」ところだと教わった。浜辺の砂粒ほど膨大な数の文字がひしめいて、その中から不思議なことに、私を選んで借りろと叫ぶ、書物との出会いがある。

鳥に歩けと言って
犬には飛べと言う
そんな社会だ
今の日本は

西 緑花（京都府）

*今の若い人の生き辛さは、こういうことなのかと気付かされた。昔はもっとゆとりがあり、大人たちも賢く、歩くのが好きな人には歩かせて、走るのが好きな人には走るように励ましていたように思うのだが。無理難題をふっかける社会などはうまくかわして、生き抜いてほしい。

壮絶な過去を抱えて眠ってる
図書館の隅の歴史コーナー

まちりこ（埼玉県）

*歴史本の中に書かれていることが、もしも自分の身に起こったなら、すさまじいできごとばかりだ。暗殺、陰謀、虐殺、謀略……。図書館ってけっこう、血なまぐさい場所だと気付かされた。

祖母に手をひかれて川を渡るとき
初めて
命の不在に気付く

まちりこ（埼玉県）

*ここに出てくる「川」は、現実の川だろうか。迎えにきてくれた祖母と三途の川を渡るときに、自分の命の不在に気付いたとも読める。あるいは、現実の川を祖母と渡っているとき、川を渡るとは境界を越えることだと気付いて震撼した、とも読める。不思議な味わいの、底深い詩。

ただ未来への入口を
開きたかっただけ
なのに勝負の二日間
次々と不測の事態

桜咲（千葉県）

*今年の共通一次試験の受験生たちの苦労には、胸が痛かった。雪やら、津波やら、そして忌まわしい事件まで。未来という希望の扉を開くための、大切な「勝負の二日間」だったのに。

子供らの成長尻目に
犬だけはいつもわたしの
足元にいる

加藤 美紀（愛知県）

*一行目の「成長尻目に」から、尾っぽを動かしている従順な犬の尻へと、イメージがうまくつながっている。子どもたちだって昔は小さくて、わたしの足元にいたのに。映像的な詩でもある。